Adrienne Rich の 愛の詩 21篇

森 田　　孟

愛の詩・21篇
Twenty-One Love Poems

アドリアン・リッチ

I

この都市のどこででも，スクリーンには明滅している
春画が，空想科学小説の吸血鬼が，
生け贄となって笞打ちに屈服している雇われ人が，
私たちも歩かねばならない……たとえ私たちが
雨でずぶ濡れのごみの間を縫い，自分たち自身の隣人の
扇状的な残虐さの中を歩いてゆく時と同じであっても。
私たちは自分の生活を　そういう鼻につく夢想や，あの地金の口走り，
あのような恥辱の数々や，共同住宅の六階の高さの窓台から
危うく落ちそうにぎらぎら輝いている紅いベゴニアや，
あるいは中学校の校庭で
球技をしている脚の長い少女たちなどから
切り離せないものだと把握することが必要だ。
誰も私たちのことを想像した者はいなかった。私たちは樹々のように生きたい，
硫黄分の多い空気の中をぎらぎら燃え立って，葉痕でまだらになりながら
それでも溢れんばかり繁茂しているスズカケのように，
私たちの獣欲は都市に根付かせたまま。

II

私はあなたの寝台で目覚める。ずっと夢をみていた。
ずい分前に　目覚まし時計が私たちを互いに引き離していた，
あなたはもう何時間も机についていた。私は何を夢みていたか覚えている，
私たちの友人である詩人が私の部屋に入ってくるが

そこで私は何日間も書き物をしていたのだ，
草稿，複写紙，詩が至るところにちらかっており，
私は彼女に一篇の詩を見せたいと思う
私の生活についての詩を。だが私はためらう，
そして目が覚める。あなたが私の髪にロづけして
私を起こしてくれたのだ。アナタガ詩ニナッテイル夢ヲ見タワ，
と私は言う，誰カニ見セタイト思ッタ詩ニ……
そして私は笑い，再び夢想に陥る
あなたを私の愛する全ての人に見せたいという欲望の，
重力の牽引力の中で
公然と一緒に動き回りたいという欲望の夢想に，それは単純ではなく，
羽毛状の草を　微動する空気の中で長くかかって下へと運んでゆく。

III

私たちは若くはないのだから，長年共に相手のいないのを
寂しがってきたのを償うには，数週間の時をかけねばならない。それなのにこの時間の
奇妙な歪みだけが　私たちが若くないことを私に知らせてくれる。
私は20歳の時　朝の街路を歩いたのではなかったか
もっと純粋な喜びを手脚に流れさせながら。
未来に耳を傾けながら
私は窓から都会へ身を乗り出していたのではなかったか
神経をあなたの調子に合わせて今ここで耳を澄しているように。
するとあなた，あなたが同じ歩調で私の方にやってきてくれる。
あなたの目は常に変らず，初夏の
ニワゼキショウの緑のきらめきを見せ，
泉で洗われた緑青色の野生のクレソンだ。
20歳の時，そうだった。私たちは共に永遠に生きそうだと思ったものだ。
45歳になって　私は私たちの限界さえ知りたいと思う。
私はあなたに触れる　私たちは明日生まれたのではないと覚りながら，
とにかく，私たちは各々，相手が生きてゆく手助けをするだろう，
そしてどこかで，私たちは各々，相手が死ぬのを手助けするに違いない。

IV

私はあなたのところから帰宅する　春のまだ早い時刻の光の中を
いつもの障壁をさっと離れて，「ペ・ドラード」，
安売り店，靴屋などを……私は一袋の食料品を
ぐっと引張って，エレベーターへ突進する
そこでは　きちんとした身なりの年輩の注意深く落ち着いた男性が一人
今にも私の目の前で扉を閉めようとした。——オネガイ，開ケトイテ！
私はその人にがさつに言う——ヒステリーダワ——彼の息が私をさえぎる。
私は台所に辿り着いて，包みをおろす，
コーヒーを入れ，窓を開け，ニーナ・シモーネのデザインの服を着て
〈太陽が差す〉を歌い……私は郵便物を開ける，
おいしいコーヒーを飲み，素適な音楽を聴きながら，
私の身体はあなたとすごしてきてまだふらつき，だるい。その郵便物から
ある男の書いたもののゼロックスが落ちた
彼は27歳で，人質で，拘留され拷問されていた，
私ノ性器ハ大変残酷ナ見セ物ニサレテイマス
私ハ苦痛デ絶エズ眠ラセテモラエマセン……
生キノビルタメニ出来ル限リノコトヲシテ下サイ。
御存知ノヨウニ，人々ハ戦争ガ好キナノダト思イマス……
それで私の度し難い怒り，私の繕いようのない傷が
噴き出して一層涙が溢れ，私はどうしようもなく泣き出すが，
連中は依然としてこの世を左右し，あなたは私の腕の中にいてくれない。

V

書物で一杯のこのアパートも　ぱちっと開きそうだ
怪物共のがっしりした顎，飛び出した
眼に，容易に。一たび書物を開けば，人は直面しなければならない
愛してきた全てのものの裏面に——
棚に掛けられて用意されたやっとこ，最良の声も
もぐもぐ声の呟きにしてしまう猿轡，
望まれない子供たち——女性，異常性愛者，目撃者たち——
を　沙漠の砂の中に埋葬してしまう沈黙，などに。
ケネスは私に教えてくれる，タイプを打ちながらブレイクやカフカを

参照できるように書物を配列してきたと。
なる程。それでも尚，私たちはまだ，考慮しなければならない，女性の精神は
讃えながら肉体は忌み嫌うスウィフトを，
母性に対するゲーテの恐れを，ジードを謗るクローデルを，
そして，分娩で瀕死に喘ぐ芸術家たちの亡霊を——
彼らは何世紀も手を組み合ってきたのだが——火炙りで黒焦げにされた魔女たちを，
これら棚の背後に何世紀にもわたって書かれぬまま積み上げられてきた書物を。
また，私たちは，尚，凝視しなければならない
私たちの生活を——文明と呼ばれる
この依然として未発掘の穴を，この置き換え行為を，この半球を
論じようとしない男たちや　論じられない女たちはいないのだということを。

VI

あなたの小さい両手は，私自身の手と全く同じ大きさ——
親指だけが大きくて長い——こういう両手になら
私は世界を托せよう，あるいは　こういう多くの手になら，
動力機械や舵取りハンドルを操作したり
人間の顔に触れたり……そういう手になら可能だろう
胎児を適切に産道で導いたり
氷山を縫って探検救助船の
水先案内を務めたり，大きなクラテール器の
細かい針状の破片を継ぎ合わせたり，
そういう土器の側面には
巫女の洞窟やエレウシスの洞(ほら)あなへと
濶歩してゆくうっとりとした女性像が描かれているが——
そういう手なら　避け難い暴力を運び去ることもできそうだ
暴力の範囲と限界を
しっかり摑み，しっかり制御するので
以後はもう　暴力は時代おくれのものとなるだろう。

VII

如何なる獣が　自らの生活を言葉で表わそうとするだろうか？
これは一体何を償うものなのだろう？
——それなのに，こういう言葉を書きながら，私も生きている。
これらは全て　荒野のカンタータを調整する
あのクズリの遠吠えの合図に，近いものなのだろうか？
それとも　あなたと一緒でない時に　私があなたを言葉で創造しようとするのは
あなたをただ利用しているだけなのだろうか，川とか戦争のように。
そして　私はこれまでどれ程　川を利用してきたことか，戦争を利用してきたことか
最悪のことを書かなくてもすむようにと——
他人の罪をではなく　私たち自身の死をでさえもなく
私たちの自由を激しくは求めることが出来なかったことを，
もしそうしていたら　胴枯れ病の楡の木々，病める川々，大虐殺も
私たち自身を冒瀆する単なる徴(しる)しにすぎなく見える程だったであろうに。

VIII

私は何年も前にサニオンにいた時の自分自身を目に浮かべられる，
足を病菌に犯されて傷ついていた，女性の姿をした
ピロクテーテスといったところで，長い道のりをびっこを曳いたり，
暗い海に突き出す岬の上に横たわったり，
音もなく立つ白い渦巻きで波に打たれた
ことが分かる赤い岩々を見降したり，
あの高さからの水の牽引力を想像して，
計画的な自殺はとても私のやることではなかったと覚ったりしながら，
それでもずっと　その傷を測り，治療に務めていた。
まあ，それで片はついたのだ。苦しみを大切に忘れずにいた
女性は死んだのだ。私はその後裔なのだ。
私は彼女から受け継いだ瘢痕組織を気に入っているが，
これからはあなたと一緒に進み出てゆき
苦痛の生涯を送ろうという誘惑とは闘いたい。

IX

あなたの今日の沈黙は　溺れたものが生きている池です
それらが雫を滴らせながら太陽へと引き上げられてゆくのを私は見たい。
私がそこで目にするのは　私自身の顔ではなくて他の顔々，
さらにあなたの顔にしても，今の歳ではない時の顔。
そこで喪われたものは如何なるものも　私たち二人が必要なもの——
古い金の時計，水で汚れた熱の記録表，
鍵……底の沈泥や小石でさえ
きらきらと認められるに値する。私はこの沈黙が恐しい，
この　はっきり言葉で表わせない生命が。私は待っています
今度だけ，この一面に展がる水を優しく開けて
あなたのために何が出来るかを私に教えてくれる
風を，あなたは名状し難いものにしばしば
名を与えてくれたのだから，他の人々に替って，私にさえ替って。

X

あなたの犬は，穏やかであどけなく，まどろんでいる，
私たちが泣いたり，夜明け時にぼそぼそ謀議をこらしていたり
電話をかけている間も。彼女には分かっている——何が彼女に分かろうか？
もし私が　人間としての傲りを発揮して，彼女の目を読み取れると
主張しても，私にはそこに　ただ　自分自身の動物の思考を見い出すだけだ。
生物は肉体上の慰みを求めて互いを見つけ出すに相違ないとか，
霊魂の声々は肉体の中を　鈍い頭では
予告できそうもない程遙かにまで疾走するものだとか
この惑星の上の夜々は，同じ旅程の人々には
冷たくなってゆくので　彼らは最後まではっきりと
一人の生きた旅人に触れていたいのだとか，
優しさを得られなければ　私たちの世界は地獄だ，とか。

XI

山頂はみな　噴火口だ。これが火山の法則で，
火山を絶えず，見るからに女性にしているのだ。
深い底がなかったり，燃える中心核のないような頂上はない，

私たちの藁の足裏は　堅くなった溶岩を踏んでずたずたに裂けはするが。
私はあなたと一緒に登りたい　易者が鼎の上に身をかがめているように
内部で煙をあげている聖なる山という山に，
山道を登ってゆく時には　私は手を伸ばしてあなたの手を求め，
握りしめて　燃え立っているあなたの動脈をまさぐりたい，
小さい，宝石のような花に，きっと気付くだろう
改めて名付けないうちは名称もなく，私たちに馴染みがないものだが
ゆっくり変化してゆく岩にぴったりくっ付いているのだ——
あの，私たちを我に返らせてくれる私たちの外部のこまごました部分が，
ここ，私たちの目の前で，私たちがやってくるのを知っていて，私たちの彼方を見ているのだ。

XII

真夜中の牧場(まきば)を回転している
惑星のように交わるがわる周転しながら，眠っていると：
一触れするだけでも　私たちに　宇宙にいるのは
私たちだけではないと覚らせるに十分です。眠っていてさえも：
二つの世界の夢の幽霊たちが
彼らの幽霊都市を歩きながら，互いに語りかけそうになる。
私はあなたのぶつぶつ呟く言葉に目覚めてしまった
まるで私自身の声が語りかけたみたいに
光のあるいは闇の年月を隔てて語りかけられたので。
でも　私たちの声は異なっている，眠っていてさえ，
また，私たちの身体はよく似ているものの，それでも異なっており
私たちの血流の中をこだましている過去には
異なった言語，異なった意味が，一杯こめられている——
もっともそれは　私たちが共有する世界のどの年代記においても
新しい意味で書かれ得るだろうけれど
私たち二人は同性の恋人どおしであった，
私たち二人は同じ世代の女性であった　と。

XIII

規則は温度計のようにこわれ，

水銀は図表化された体系の外にこぼれ散る，
私たちは言語も法則もない国に
飛び出して，ワタリガラスやミソサザイを追い回す
夜が明けて以来まだ探索されていない峡谷を
私たちが一緒に行うことは如何なることも全くの発明なのだ，
私たちに与えられる地図はどれも　何年も
時代遅れだった……私たちは沙漠を駆け抜けてゆく
水は保つだろうかと心配しながら
幻覚による幻はただの村々になり
ラジオの鳴らす音楽が明確になる――
「薔薇の騎士」でも「神々の黄昏」でもなくて
一人の女性の声で，古い歌曲を歌っている
新しい歌詞で，落ち着いたバスで，フルートは
法の埒外にいる女性たちがかき鳴らし，指で吹き鳴らしていた。

XIV

あなたの　水先案出人観だった
あなたに対する私の見方を裏書きしてくれたのは。あなたは言ったものだった：彼ガ
ワザト　波ノ中ヘ突キ進ムヨウニ舵ヲトッテイルノヨ　と
私たちは開いた昇降口にうずくまりながら
伸び縮みする袋の中に吐き続けていた
サンピエール・ミケロン両島の間を行く三時間もの間。
私はこの時ほど　あなたに親しみを抱いたことはなかった。
密集した船室で　新婚旅行の夫婦たちが
互いの膝や腕に丸くなってすり寄っている中を
私は手をあなたの腿の上において
私たち二人を共に慰めようとしていた，あなたの手は私の手の上に乗せられ，
私たちはそうしてじっとしていた，共に身体の
苦痛をこうむりながら，まるで苦しみとは全て
肉体に関わるものとでもいうように，私たちはそのように触れ合っていた
赤の他人の面前で，彼らは何も知らず余り気にもかけなかった
自分たち個々の苦痛を吐き続けながら

まるで苦痛は全て肉体に関わるものとでもいうかのようだった。

（漂流詩，無番号の）

私たちに何が起ころうと，あなたの身体は
私の身体につきまとうだろう——優しく，繊細に
あなたの性愛行為が，太陽に洗われたばかりの
森の中の渦巻き状のシダの
半巻きの葉のように。あなたの動き回るたっぷりした腿
その間に私は顔をすっかり埋(うず)めに埋めて——
その箇処の無邪気と叡智とを私の舌はそこに見い出していたのだ——
私の口中で生き生きと飽くことなく踊り回るあなたの両乳首——
あなたはしっかりと守ってくれるように私に触って全身を
さぐり回し，あなたの力強い舌と細っそりした四指が
私が何年もあなたを待ち続けてきた箇処に
私の薔薇色に潤った洞窟に　辿り着く——何が起ころうと，こうなのです。

XV

もし私があなたと一緒に　あのメキシコ湾流に暖められた
白い空漠たる澄んだ緑の水の渚に横たわっていたとしても
また　あの渚に今横たわっていても，私たちはそのままそうしてはいられなかっただろう
風が細かい砂を私たちに吹きつけていたのだから
それはまるで　私たちを責めているかのようだった
もしも私たちが　それに抗おうとしてしくじったのなら——
もし私たちが別の処へ出かけて
互いの腕の中で眠ろうとしても
ベッドが囚人たちの簡易寝台のように狭く，
私たちは疲れて同時には眠れず
以上が私たちの分かったことだとしたら，それなら以上が私たちの実際の行いだったのだ——
それは私たちの不首尾だったのだろうか？
もし私が状況に固執すれば　私には責任はないと
感じられただろう。自分が選んだのではない

と言う女性だけが，結局は負けるのだ。

XVI

あなたと都市一つ隔てて，私はあなたと一緒にいる，
丁度ある八月の夜のように
月が照り，入江らしく暖かで，海に囲まれていて，私はあなたが眠るのを見詰めていた，
みすぼらしい，光沢の失せた木製の鏡台
私たちのブラシや本やガラス壜が月光の中にごった返していた——
あるいは，塩の霧がかかった果実園で，あなたの傍に横たわりながら
赤い没り陽を小屋の網戸越しに見詰めていた，
ト短調のモーツアルトの曲がテープレコーダーで奏でられており，
海の音楽に合わせて眠りに陥っていったのだった。
このマンハッタン島は　私たち二人には
十分に広く，且つ，狭い。
私には今晩　あなたの呼吸が聞きとれ，私には分かるのだ　あなたの顔が
仰向いている様が，薄明りがくっきりと描き出している
あなたの気高くて繊細な口元には
嘆きと笑いとが同居して眠っているのが。

XVII

何びとも　誰かを愛するように宿命づけられていたり　運命づけられていたりはしない。
事は偶然に起きるのであり，私たちは小説の女主人公ではない，
そういうことは私たちの人生に起きるのだ　車の衝突や
私たちを変える書物や，私たちが引越していって
好きになる隣人たちのように。
『トリスタンとイゾルデ』は　殆ど物語などではない，
女性は少くとも愛と死の
違いは知っているべきだ。毒杯は要らない，
悔い改めも不要。テープレコーダーなら私たちの何か亡霊のようなものを
捕えただろうになどというのは　単なる気まぐれ。テープレコーダーは
ただ単に作動するだけではなく　私たちの言い分を聴いて

私たちの後に続く者たちに教えることができる筈だ：
これが私たちであり，これが私たちが愛そうとしたやり方であり，
これらが私たちに向けられて用意された暴力であり，
これらが私たちの内部で私たちが用意した暴力である　と，
私たちの内部のと私たちに向けてのと，私たちに向けてのと私たちの内部の
　と。

XVIII

ウエストサイド・ハイウェイには雨，
リヴァーサイドには赤い灯：
生キテユケバユク程　私ハ益々考エルヨウニナリ
二人ノ人ガ一緒ニイルノハ　奇蹟デス。
あなたはこれまでの経歴を話してくれる
今度は，震えがあなたの言葉の表面に浮かび出る。
私たちの生活の噂が　私たちの生活になる。
今　あなたは　確か或るヴィクトリア朝の詩人の所謂
〈塩が疎遠にする海〉の向こう側で遁走(フーガ)状態にいる。
そういうのが心に浮かぶ言葉だ。
私は疎隔を感じる，確かに。黎明が夜明けの方に
突進してゆくのを感じた時のように。何かが：光の裂け目――？
悲しみと怒りの間に密接して　ある空間が開く
そこで私は　アドリアンだけになる。そしてもっと冷静になってゆく。

XIX

もっと冷静になってゆけるだろうか，私が再び
自らに触れ始めて，粘着を引き離す時に。
後方を凝視していた素顔がゆっくりと振り返って
現在を見詰めると，
冬，都市，怒り，窮乏，及び死を見る眼と
口唇が分かれて言う，私ハ生キ続ケテユクツモリカ？　と。
私は冷静に話しているのだろうか，夢の中やこの詩で
不思議ナコトハ何モナイ　とあなた方に告げる時に。
（私は最初からあなた方に話した，私は日常生活が欲しいのだと，

このマンハッタン島は　私には十分な島だと。)
もし私があなた方に知らせることができるなら——
女性が二人一緒にいるのは
文明社会ではどうしても無邪気な作業とはされてこなかったのだし，
人が二人一緒にいるのは
それが常態なら勇壮な作業で，
松脂状物質がゆっくり採集され，ためらいがちに斜めに移動してゆくことで
注意の限りを尽すのが至極当然なのだ——と知らせられるなら
それを選んだ人々の顔々を見て下さい。

XX

私たちがいつもまさに交わそうとしていた会話が
私の脳裡を駆けめぐる，
ハドソン河がニュージャージーの光の中で震える夜
その水は汚れてはいるが　時々は月を
映すことさえある
そして私は気付く　愛している
一人の女性が　神秘の中で溺れていることに，恐怖がその喉に巻きつき
髪のように彼女の息をつまらせていることに。これが彼女なのです
私が言葉を交わそうとした人でした，その傷ついた，表情に富む頭は
苦痛からは面(おも)を逸らせて，更に深くへと引き込まれてゆく
私の言うことが聞こえない所へ，
だからまもなく私は　自分が己れ自身の魂に語りかけていたのだと分かることだろう。

XXI

暗い楣(まぐさ)，石器具で波状の跡をつけられた
大きな球状の青い異国の石々
地平線下から昇ってくる真夏の
夜の光——私が「光の裂け目」と言った時
こういう意味だったのです。そしてこれはストーンヘンジではなく
単なる如何なる場所でもなくて，心のことでした
孤独を選んでも　それは共有されているので

寂しさは感じないですむ所へと立ち帰ってゆく心のことだった
容易でもなく苦痛がないわけでもないが，環を
濃い影を，強い光の当たる所を，杭で囲うために。
私はその光の中で　一つの姿になろうとした，
闇で半ば損なわれてはいるが　何かその空間の向こうに
動いてゆくものに，月を迎える
石の色はしているが石を越えたものに，
つまり　一人の女性に。私はここを歩くことを選ぼう。そしてこの環を描くことを。

1974—1976.

アドリアン・リッチ (Adrienne Rich, 1929—) は，幼少期から詩作を開始し，名門の Radcliff College を卒業する年には，彼女の作品群は W.H. Auden に認められて，処女詩集 *A Change of World* (1951) が，Yale 大学青年詩人叢書の一冊として刊行されるという，誠に幸先のよい詩人生涯を送れることになった。初期の作品は，Frost, Yeats, Stevens, Auden, Richard Wilbur などを範とする端正な詩型の作風であったが，次第に変化しはじめる。David Perkins が指摘するように[1]，Rich は，詩人になろうとして自分は，女性としての自己をまず圧えた，と言い，詩人というのは男性的なものだからと主張した。それは，女性である限りせいぜいでも二流の詩人に留まる意と受け取られた。1963年になっても未だ，Rich は，女性や自分自身について語るほうが自然だと思われる時に男性について，男性を通して語っており，駆け出しの詩人に普通見られる順応性，女性詩人としての服従が，初期の詩集には見られると件の Perkins は観ている[2]。

だが，3冊目の詩集を公刊した1973年頃から，彼女は，それまで自作で支配的だった形式性 (formalist style) を棄てはじめ，meters (韻律)，stanza (詩節) から離れて lineation (行単位の配列法)，juxtaposition (並列法)，metaphor (暗喩) に依然することが多くなり，過激な Feminist (女権拡張主義者) へと傾斜しはじめる。既に述べたような彼女の早くからの詩観や主張からも当然予想されるところであったが，24歳で結婚して次々に3人の男児の母親となりながら，詩人として，また，大学の教師となって活動する生活は，安易なものであった筈はないから，彼女自身の実生活からも出てきて当然の姿勢

であったろう。

1963年以降約10年間の Rich の詩作品から，この時期の彼女の幾つかの要素を Perkins は次のように抉り出している[3]。女性の役割の〈不安〉，結婚の二律背反と幻滅，陰鬱な死の強迫観念，瞬間と性の中で生きようとする衝動，絶対的な解放という幻想，やり直そうという決意，などであり，生と苦渋及び社会の圧迫・不正に，極度に最初から鋭敏であった Rich の作品は，近年益々深みを加え，自分自身の状況への固執から視野が広がって，同性の読者たちに，Feminist の意識を目覚めさせようとする詩が，多く見られるようになる。

この，ベトナム反戦を初めとする合衆国内の，過激な女権拡張・黒人差別撤廃などの政治上の運動に激しく関わり，情緒・感受性の真執・複雑さと，それらを心象・暗喩で鮮明に表現する力によって知られる Adrienne Rich が，夫と死別後 "lesbian" としての立場を表明する[4] 連作詩を書いた。それが1974—76年に発表した一連のソネット風の作品21篇 "Twenty-One Love Poems" で，九冊目の詩集 *The Dream of a Common Language* (1978) に収録された。上に訳出したものである。(ソネット風と述べたのは，厳密な14行詩は2篇 (VIII, XVIII) のみで，他はいずれも，12～21行の詩篇だからであるが，新しいソネット型式とみてよいだろう)。

"lesbian" としての立場と Perkins は述べたが，これも彼自身の指摘のように，「Rich の詩風が，〈告白〉流だとしても，それは，Lowell, Berryman, Sexton, Plath のような扇情的な語の使用域においてそうなのではなく，彼女の詩の中の〈私〉は，読者が Rich 自身のことだと推測するような状況の中で，苦しい内面吐露の感情を声化したもの」[5] であるから，この連作詩も，あくまでも，女性の〈私〉が同性の〈あなた〉に寄せた愛の詩である。

この連作，まず，都会の猥雑さを具体的な細かい描写で印象深く描き出すことから始めるが，〈私たちの生活〉も，そういう日常性からは切り離せないものであり，特別のものではないのだという認識を表明する (I)。それが，「誰も私たちのことを想像した者はいなかった」 "No one has imagined us." や，「私たちの獣欲」"our animal passion" などの詩句・詩行共々，この〈愛〉が，普通の異性間のものではなさそうな予感を読者に与えるであろう。最後に，「木々のように生きたい」"We want to live like trees" という印象深い表明をした〈私〉は，II になって，まず，「あなたのベッドで目醒める」"I wake up in your bed"。殊更に，「公然と一緒に動き回り，私の愛する皆にあなたを見せたい」"the desire to show you to everyone I love,/to move openly

together" などの詩句が，I で示された予感を一層強めてゆく。「重力の牽引力」"the pull of gravity" は，世の圧力を思わせ，その中での〈愛〉の推進が切望される。〈あなた〉は，机で仕事をする人で，どうやら，作者，そして，〈私〉と同類の職業の人か。III では，〈あなた〉の眼の描写が印象的であり，ここで，私たちは生死を共にするだろう，という一層深い愛が表明される。IV で，〈私〉は〈あなた〉のところから帰宅する。それまでの途中の具体的な描写が，やはり素晴しいが，開いた郵便物からは，拘留中の男からの訴えが出てくる。世間の並みの性風俗に反した男だろうか。これは，男性であるが，〈私〉は，この男のために，激怒する。せっかく〈あなた〉と甘美にすごしてきて，〈私〉の身体はふらふらとだるい状態だったのに (my body still both light and heavy with you)。〈あなた〉が今，側にいてくれないのでやるせないと訴える。

V は〈私たち〉の生活に対するこれまでの社会の伝統的な圧迫が述べられる。ジイドは，同性愛者だったとされているのは周知だろう。"lesbian" の〈愛〉が，この連作の主題であることは，こうしてこの辺りまで来ると明らかとなる。

〈あなた〉の手のような手になら，暴力に打ち克ちそうだと，具体的に羅列されている諸行為が，生彩を放つ (VI)。

VII に至ると，言葉—表現，の意義が問われる。〈川〉が突然出てくるが，それは Rich 自身が初期の詩篇以来，しばしば自作の中で使用してきたイメージなのである。この詩も最後の2行の具体的な譬喩や挙例の生彩さが忘れられないだろう。

VIII で，〈私〉がどうやらかつて，自殺を図ったことがあるらしいのが判明する。過去の挫折の思い出を語りながら，しかし，その経験の傷みは傷みとして保持するにしても，もう，苦しみを後生大事に忘れないでいるような女性ではない。自分は〈あなた〉と一緒に，「苦痛の生涯を送ろうというような誘惑とは闘いたい」"fighting the temptation to make a career of pain." と力強い決意が語られる。

IX では，〈あなた〉の沈黙は池だ，という水のイメージと鮮烈なメタファーが眼目で，この沈黙——池の水，を開げてくれる風を，待望する。喪くしたものの一つに〈鍵〉"key" があるが，この〈鍵〉は，〈私たちの生活〉を社会で広く認めさせるための，厚い社会の扉を開く〈鍵〉でもあろう。

X では，〈あなた〉のペットの犬が登場し，犬に托して，別の視点から，テ

ーマが追求される。「私自身の動物の思考」"my own animal thoughts"は，Iの「獣欲」"animal passion"と呼応していよう。

XIは，この連作の丁度真中に当たる作品で，ここに，女性を火山に擬するメタファーが表われる。手首の動脈の脈拍を，「宝石のような花」"jewel-like flower"に譬えているのが美事であろう。

XIIの「惑星のように」"like planets"という，〈私たち〉二人の睡眠中の動きに対する譬喩は，Xの「惑星の上の夜々」"the planetary nights"と呼応して，この連作が，XIを中に挟んで前半と後半とをイメージの上でも点対称のようにしていることを示すものだろう。このXIIで，〈私たち〉が同世代の同性の恋人どうしであることが明言される。この，「同じ」であることが強調される作品に，声と身体が「異なっている」，意味や言語が「異なっている」と"different"が4回も使用されて，「異なっている」が印象づけられるのにも注意したい。「異」によって「同」を強調する妙技であろう。

XIIIはまた，イメージが転換され，世の規則も温度計のようにこわれるもの"The rules break like a thermometer"だという譬喩が美事である。〈私たち〉は今は，〈沙漠〉"desert"を駆けてゆくのだが，いずれオアシスにも出逢えるだろうし，〈沙漠〉を抜け出ることもあろう。"The rules..."で始まり，"...outside the law."で終る一篇で，最初と最後とはrule—lawと呼応している。

XIVは，〈あなた〉に対して〈私〉が最も親密感を覚えた"I never felt closer to you"時の船旅の思い出が語られ，本当の苦痛は肉体上のものだけではなく精神上のものが多いと主張される。

XIVの次に挿入されているのは，番号もない漂流してきた詩とされるもので，ここで思う存分，〈私たち〉の愛の実態が具体的に，実に官能的に，しかも美しく展開されて，読者を圧倒する。「半巻きの羊歯の葉のように」"like the half-curled frond/of the fiddlehead"という植物の譬喩が，Iの「木々のように生きたい」という願望と呼応していよう。

XVは，〈私たち〉二人が海辺で過した日のことを語りながら，如何なる苦境も，情況や運命のせいにして逃げ出したりせず，全ては自らが選んだ道の結果だとしない限り，敗北だ，と毅然たる決意を述べる。

XVIの〈私〉は，今，〈あなた〉とは別の所で夜をすごしているが，それでも，真夏の海辺で二人で過した日のように，〈あなた〉と一緒に居ると感じていられる。IVの〈私〉のように，少しでも離れると切ない，などとはもう訴

えない。この一篇も，二人が過した部屋の様子の具体的な描写が印象深い。

XVII では，この世での愛は，宿命や運命ではなく，〈出逢い〉の問題であるし，女性は少くとも愛と死の違いは知っているべきだと言う。〈私たち〉の後に続く人たち (those after us) への関心が顕著となる。テープレコーダーは，「これが私たちに向けられた暴力だ」"these are the forces they had ranged against us" と教えてくれられるもの，と述べているが，VI の「以後はもう暴力は時代遅れとなろう」"violence ever after would be obsolete" と，"forces"—"violence" が呼応している。〈私たち〉に向けてのと，〈私たち〉の内部のと，両方の〈力〉に，〈私〉は目が行き届く状態になっている。

XVIII の〈私たち〉は，また一緒に居る。ニューヨークのアパートで過している様子が，冷静に見詰められている。〈私〉には「光の裂け目」"a cleft of light" とでもいうべき何か (something) が見えてくる。これは最後の XXI で，再び触れられ簡潔に敷衍される。XVIII で「光の裂け目」が現前し，「ある空間が開いて」"a space opens" 〈私〉は Adrienne＝作者となる。そして次の XIX で，再び，文明世界下での女性の同性愛，女性が二人で同棲する行為，は一つの作業 (work) だという省察が展開される。「このマンハッタン島は私には十分な島です」"this island of Manhattan was island enough for me." は，XVI の「このマンハッタン島は私たち二人には十分に広く且つ狭い」"This island of Manhattan is wide enough for both of us, and narrow:" と呼応している。

〈私〉が，〈私たちの生活〉を正確に把握してその認識を〈あなた方〉読者に覚らせられたら，「それ〔＝同性愛〕を選んだ人々の顔を見て下さい」"look at the faces of those who have chosen it." ときっぱり宣言するのが XIX である。この "chosen"「選んだ」は，最後の XXI でも使われ，"chosen" 及び二度現われる "choose"「選ぶ」としっかり呼応する。

XX になると，〈あなた〉も傷つき，溺れ，〈私〉の語りかけも聞こえない深みへと引き込まれてゆくので，〈私〉は自分の魂に呼びかけていることになると覚る予感が，現われる。XII の「まるで私自身の声が語りかけたみたい」"as if my own voice had spoken" と呼応していよう。XX でも，川の水の具体的な描写が美しい。水のイメージは，VII の「川」や，VIII の「海」，IX の「池水」，XIV の船旅の中の「海」と「水」，XV, XVI の海辺の「水」などと呼応する。呼応についてはこれまでも幾つも指摘し言及してきたが，他にも，"pilot" は，「水先案内をする」という動詞で VI に現われ，わざわざ

船を揺らせる「水先案内人」の名詞で XIV に出てきて呼応し合っているし，VI のクラテール土器に描かれているエレウシスの「洞窟」"cave" は，XIV の次に挿入されている〈漂流詩〉の最後の行，「私の薔薇色に潤う洞窟」"my rose-wet cave" と，また，VII で遠吠えの合図を送っているクズリ（北米産，イタチ科のずんぐりした肉食哺乳動物）"wolverine" は，X の〈あなた〉の犬 "dog" と，あるいは II の「重力の牽引力」"the pull of gravity" は VIII の「水の牽引力」"the pull of that water" と，それぞれ呼応し合っている。これらの呼応が，個々の作品を相互に連携させ，この連作は幾重もの呼応の閃光によって結合されることになる。

XXI は，連作を閉じる作品。〈あなた〉と同じ心の孤独 "solitude" を選び，〈あなた〉も同じ心で耐えようとするのだから，〈私〉も「一人の女性」"a woman" として，「光の裂け目」"a cleft of light" を歩いてゆくことを選び採ろう，その時生ずる「環」"circle" を描いてゆく道を選ぼう，という〈私〉の選択の表明である。それはまた，同性の読者への熱い呼びかけであり，男性の読者の共感をも凛として促してやまないものとなる。"I choose to walk here. And to draw this circle." と，この連作21篇の詩群は，XXI の最終行の最後の語 "circle"「環」で終る。XXI で3度使われる "choose" "chosen" が XIX の "chosen" と呼応していることは既に述べた通りである。数々の印象深いイメージの相呼応によって，ぐるぐると環 (circle) を描きながら展開されてきた21篇は，最後の語 "circle"（環）によって閉じられるが，その「環」はまたそれ以後，読者の心の中で大きく展がってゆく「環」でもある。

これは，「光の裂け目」(a cleft of light) を見い出し，それを大切に生きてゆこうと「選択する」(choose) に至る過程が描かれた〈愛〉の連作詩であった。

*

1984年に，それまでの34年間の詩業の集大成とも言うべき選詩集『扉枠の事実』*The Fact of a Doorframe* を出版した Rich は，その序文で述べている。詩人とは特別な感受性や精神の洞察力を具えた人なのだから，日常の普通の生活から超然と生活して当然なのだ，という考えがあるが，自分はそれは信じたことがなく，私の詩作の衝動は，聞いてほしい，他人の魂の中で反響してほしいという希いなのだ[6]，と。本稿で取り上げた21篇の愛の連作詩は，彼女のその希いをよく叶える重要な作品ではあるまいか。彼女は，また，その選詩集のタイトルの出所とした自作の詩 "The Fact of a Doorframe" を，その書

物の扉にエピグラフとして付したが，その作品は，彼女のそれまでの詩業，彼女の本質を，よく象徴するものと自ら認めたからであろう。最後に，その詩，"The Fact of a Doorframe"「扉枠の事実」を掲げておきたい。その作中でいう「君の血染めの破片」の一つに，件の「愛の詩・21篇」も間違いなく数えられると思われるのだから。「扉枠の事実」は1974年の作で，作品の標題がそのまま，本文の一部になる仕組みの詩である。

扉枠の事実

とは　両手でつかまって
いるものが何かあるということだ
その間にゆっくりと私のひたいを木の材に押しつけて
それを取り去ってゆく
あの最も古くからの苦しみの動作の一つなのだ
マキバが戦士たちのために
勇気を鼓舞する歌を歌う時のように
音楽は強力にされた苦しみなのだ

私は鷲鳥番の少女のことを想っている
彼女は高い門を通り過ぎてきたが
そこにはお気に入りの雌馬の首が
弓形の部分に釘付けにされていて
人間の声で
もし彼女が今　汝を見ることができたら，汝の母の心臓は破裂することだろう
と　ファラダの
首が言った

さて，再び，詩よ，
最も普通の生きている物質から切り取られて
アーチ形通路に，表玄関に，枠にとされた
激しい，秘義の，普通の詩よ
私は君のために手に入れよう，君の血染めの破片を，君の
太古からの頑固な平衡を
——地球が震動する時——

粒子から燃え出てくるのを

1974.

(注)

1) David Perkins, *A History of Modern Poetry: Modernism and After* (Harvard University Press, 1987), p. 597.
2) *Ibid.*, p. 597.
3) *Ibid.*, p. 598.
4) *Ibid.*, p. 597.
5) *Ibid.*, p. 597.
6) Adrienne Rich, *The Fact of a Doorframe: Poems Selected and New 1950–1984* (W. W. Norton & Co., 1984) p. xv.

なお，拙稿「現代英米詩覚え書 (14)——Adrienne Rich」(「楡」No. 14, 1985年11月刊, pp. 46–48) も参照されたい。

(訳注)

I. **地金の口走り** (blurt of metal) 本質，気性まる出しのおしゃべり。

VI. **クラテール器** 古代ギリシャ・ローマで葡萄酒と水を混ぜるのに使用した調合用の器。広口で二つの取っ手が口の付け根についている。

エレウシス 古代ギリシャ Attica の Demeter の秘義で有名だった都市。

VIII. **ピロクテーテス** (ギリシャ神話) ヘラクレスの鎧持ち，弓の名手，トロイ戦争で Paris を殺した。

XIII. **『薔薇の騎士』** リヒャルト・シュトラウスの歌劇。1911年にドレスデンで初演された。

『神々の黄昏』 ワーグナーの楽劇『ニーベルンゲンの指輪』の第四部。1876年に初演。

XIV. **サンピエール，ミケロン** ニューファウンドランド島南方のフランス領の小さな二つの島。

XVII. **『トリスタンとイゾルデ』** アーサー王の円卓騎士トリスタンとマルケ王の妻イゾルデとの恋愛と死を扱ったワーグナーの楽劇。1856年に完成，1865年にミュンヘンで初演。

楣 窓・戸口などの上部の横木。

XXI. **ストーンヘンジ** 英国 Miltshire 州の Salisbury 平原にある巨石柱の二重の環状列石で，新石器時代～青銅器時代のもの。